

新たな意思疎通の手段

「より深い診断可能に」

「ベースボール&スポーツクリニック」医師・馬見塚尚孝氏㊦

――(㊦から続く)コロナ禍のスポーツ界では、選手がSNSを通じてメッセージを発信したり、ファンと交流する機会を設けたりするケースが増えています。このようにコロナの副産物もあるようです。

◆5G(第5世代移動通信システム)の技術が入ってきて近い将来、競技場の至る所にカメラが設置されるようになります。自分自身でより臨場感のある映像を選択し、見たい角度で見られる時代になるでしょう。また、人工知能(AI)の発達によって新しい「見せ方」も出てきます。自分が見たい選手、例えば、大谷翔平選手を見たい角度で見られるように進化するはずです。

――医療従事者がスポーツに親しむ意義についてどう考えますか？

◆チームスポーツの場合、仲間と協力して一丸となってプレーすることはすごく楽しいものです。たとえ、高い壁があっても乗り越えられるかも知れません。私のように、医療者として仕事している視点から言うと、スポーツをしている患者さんが受診に来られた時、その人が話している内容についてより深く理解できるのは間違いないですね。

――JML大会に期待することはありますか？

◆以前は学会が開かれている時、他の組織の先生と飲み会をするなどコミュニケーションを図る機会がありました。ところが、コロナの影響もあり、すべてオンラインで行われています。そうした状況だけに、同好の人が集まりスポーツを通じてコミュニケーションを取ることができる機会は非常に価値があると思います。

馬見塚尚孝 大分県出身。琉球大医学部卒業後、筑波大大学院修了(医学博士)。筑波大附属病院水戸地域医療教育センター講師を経て19年から現職。日本スポーツ協会スポーツドクター。「新版『野球医学』の教科書」(ベースボールマガジン社)など著書多数。